

## 脇蘭室的思想 —向聖賢學習修己治人之道—

田世民\*

### 摘要

本文的目的是探討前此在近世思想史不受注目的儒者、豐後國（今大分縣）速見郡小浦出身的脇蘭室（1764-1814）的思想。蘭室在 1784（天明 4）年 21 歲時遊學熊本、入藪孤山（1735-1802）之門。翌年拜訪豐後的三浦梅園（1723-1789），向其問學請益。1787（天明 7）年 24 歲時遊學大坂、師事懷德堂的中井竹山（1730-1804）。蘭室在大坂僅停留五個月，但是之後透過頻繁的書信往返、以及 33 歲時再訪大坂，與竹山及懷德堂有關的知識人之間有著密切的交流。本文分析蘭室的《歲闌漫語》等著作，探討其如何強調「修己治人之道」、並以此評價顏淵。還有，分析蘭室向熊本藩執政者的建言論著，來探討他的經世思想。

關鍵詞：脇蘭室、歲闌漫語、修己治人、熊本藩

\* 淡江大學日本語文學系副教授

# airiti

## Waki Ranshitsu's Thought: Learning to the Sages for the Ideal Political Way

Tien, Shih-min\*

### Abstract

Waki Ranshitsu(1764-1814) was the outstanding pupil of Nakai Chikuzan(1730-1804) of the school Kaitokudo in early modern Japan. Ranshitsu is a important person to understand the Kumamto Clan governance and educations in Higo, Bungo and other places near that. The paper deals with Ranshitsu's thought, especially his political thought and the relations among Kaitokudo and other intellectuals in early modern Japan.

Key words: Waki Ranshitsu, *Sairan mango*, the ideal political way, the Kumamto Clan

---

\* Associate Professor, Tamkang University Department of Japanese

## 脇蘭室の思想 —聖賢に学ぶ修己治人の道—

田世民\*

### 要旨

本稿は、これまで近世思想史の中であまり注目されてこなかった、豊後国（今の大分県）速見郡小浦出身の儒者脇蘭室（1764-1814）を取り上げてその思想を考えるものである。蘭室は、天明4（1784）年21歳の時、熊本に遊学し藪孤山の門に入り朱子学を学んだ。そして、天明5（1785）年とその翌年の2度に亘って、豊後富永の三浦梅園を訪ねて教えを請うた。さらに、天明7（1787）年24歳の時、大坂に遊学して懐徳堂の中井竹山の門を叩いた。大坂での滞在はわずか5ヶ月だったが、その後頻繁な書簡の往復や33歳の大坂再訪などによって師竹山をはじめ懐徳堂周辺の知識人たちと密接な交流を重ねた。本稿は、まず蘭室の『歲闌漫語』といった著作を取り上げ、そこに込められた「修己治人の道」という大きなメッセージ、およびそれに関わる蘭室の顔子評価を考える。さらに、蘭室の思想がいかに熊本藩の指導者への建言書に集約され経世論として展開されていったのかを見ていく。

キーワード：脇蘭室、歲闌漫語、修己治人、熊本藩

\* 淡江大学日本語学科副教授

# airiti

## 脇蘭室の思想 —聖賢に学ぶ修己治人の道—

田世民

### 一、はじめに

本稿は、これまで近世思想史においてあまり注目されてこなかつた、豊後国（今の大分県）速見郡小浦出身の儒者脇蘭室（1764-1814）。名は長之、字は子善、通称儀一郎。号は愚山・菊園とも）を取り上げてその思想を考えるものである。蘭室は、天明4（1784）年21歳の時、熊本に遊学し藪孤山（1735-1802）の門に入って朱子学を学んだ。そして、天明5（1785）年とその翌年の2度に亘って、豊後富永の三浦梅園（1723-1789）を訪ねて教えを請うた。さらに、天明7（1787）年24歳の時、大坂に遊学して懐徳堂の中井竹山（1730-1804）の門を叩いた。大坂での滞在はわずか5ヶ月だったが、その後頻繁な書簡の往復や33歳の大坂再訪などによって師竹山をはじめ懐徳堂周辺の知識人たちと密接な交流を重ねた。

寛政3（1791）年、大坂での遊学を終え小浦に戻って子弟の教育に携わった蘭室の許に、14歳の帆足万里（1778-1852）が入門した。そして、寛政9（1797）年に師竹山の推挙で肥後熊本藩の藩校時習館の訓導として招聘され、翌年に正式に赴任したが同年の暮れに多病を理由に辞職を願い出た。寛政11（1799）年、藩から鶴崎（今の大分市東部）詰藩士の子弟の教育を命ぜられ、それ以来51歳で没するまでその地で多くの門弟の指導に携わっていた。その門下には毛利空桑（1797-1884）など鶴崎出身の子弟は多くいたが、日出の帆足万里や岡の角田九華（1784-1856）などその周辺地域出身の高弟も輩出した。彼は豊後、肥後を中心とした九州各地の知識人や僧侶と交流を深め、また懐徳堂との繋がりで上方の知識人たちとも親密な交友関係を保っていた。

蘭室は漢詩文に長じ、生前に漢詩文集『蘭室集略』を出版してい

る。また、和学の造詣も深く、和文の隨筆や和歌を多数書いている。しかし、多くの儒者たちと違って、彼は四書五經といった経書の解釈に関する著作を遺していない。また、弟子の帆足万里が西洋の知識に触発されて書いた『窮理通』のような著作は、蘭室にはない。恐らく、それはこれまで蘭室があまり注目されてこなかった要因の1つなのかもしれない。もちろん、早く西村天囚（本名は時彦、1865-1924）が明治期に『学界乃偉人』<sup>1</sup>の中で蘭室のことを取り上げ評価しているように、その生涯を紹介し伝記風に記述したものは少なくない。しかも、三浦梅園や帆足万里との繋がりで彼のことが述べられ評価されることが多い。たとえば、筒井清彦『愚山脇蘭室先生』では「先生（蘭室のこと——引用者注）は、いわゆる「豊後学」の祖、三浦梅園にその学問をうけ、これを帆足万里に伝えたのである」<sup>2</sup>と述べている。

他方、帆足図南次は竹山が蘭室『蘭室集略』のために序文を書き、蘭室が竹山の『逸史』と『草茅危言』のために序文や跋文を寄せたということに触れた上で、「いわば竹山は愚山を自分の学問を正しく受け継ぐにふさわしい人物とみていたからにほかならない」と指摘している<sup>3</sup>。しかし、これまでに豊後や大坂の学問と深い関わりを持った、蘭室の思想を正面から論述し、そして思想史的にその位置づけを捉える研究は皆無である。

凡そ学問の先達として親しく接して教えを請うた人物だけに、その人々から何かしらの影響を受けたということは否めない。最初の

<sup>1</sup> 西村天囚『学界乃偉人』（梁江堂書店、1911年）、49-73頁。

<sup>2</sup> 筒井清彦『愚山脇蘭室先生』（豊岡小学校創立百周年記念行事事業達成会、1974年）、1頁。それに対して、小串信正是やや違う意見を次のように述べている。「脇蘭室への最初の評価は、三浦梅園の学術を帆足萬里に伝えたという学流的ものでした。三浦梅園の「梅園学流」を受けて帆足萬里の「萬里学流」への豊後学的な流れに脇蘭室が果たした功績には大きなものが有ります。しかし、三浦梅園の哲学思想「三浦哲学」は脇蘭室には余り伝えられず、帆足家には父帆足通文（清伯武、通称兵部・典膳、号錦溪）や異母兄帆足卓之（名高堅、通称貞之允）を通じた影響の方が大きかったのです」という。同『脇蘭室関係資料集』（脇蘭室を読む会、2014年）、8頁。

<sup>3</sup> 帆足図南次『叢書日本の思想家、帆足万里・脇愚山』（明徳出版社、1978年）、188頁。

師ともいえる藪孤山や、入門はしなかったもののその教えを直に受けた三浦梅園らから、蘭室は大いに啓発されたと認められよう。しかし、後述のように、「修己治人の道」を何より強調するという蘭室のいわば経世志向の思想は、やはり中井竹山から示唆されるところが大きかったと言わねばならない。

たとえば、天明 8（1788）年 5 月、大坂懐徳堂での遊学を終えた蘭室は、竹山に「竹山先生に呈す」という手紙を書いている。その中で、「然るに小子窺かに疑ふ。聖賢の道、世を理め時を済ふこと大と為す。故に其れ顧れて上に在るなり。必ず斯の民を新たにし、而して吾が徳以て益明らかになれり」<sup>4</sup>と、聖賢の道は「理世済時」つまり世の中を治め救うためにあるのではないかと述べる。その上で蘭室は、経史詩そして礼学に優れた業績を有する竹山<sup>5</sup>に必ず「時措の道、調査の方」があるはずなのに、なぜ自分にそれを提示され得なかつたのかと問い合わせる。

後、寛政 8（1796）年に大坂を再訪した蘭室は、「此れ老夫経綸の寓する所なり」と、竹山から『草茅危言』を提示された。それで予ての疑問が晴れた蘭室は、同書を読んで感服し「此の書直ちに常世の用と為」することを願つたのである<sup>6</sup>。そこから、蘭室は夙に経綸の志を胸の中に潜めていることが分かる。そして、その志は師竹山とその『草茅危言』から大きな示唆を受けたものであるといってよからう。また、竹山が蘭室のことを老中の松平定信に推挙し、その後熊本藩藩校時習館の訓導への就任が実現の運びとなったのも、蘭室の「王佐」の才能が認められてのことには違いない。

以下、まず蘭室の『歲闌漫語』といった著作を取り上げ、そこに込められた「修己治人の道」という大きなメッセージ、およびそれ

<sup>4</sup> 『蘭室集略』卷之八、「書」、久多羅木儀一郎編『復刻脇蘭室全集』（防長史料出版社、1980 年）、226 頁。原漢文。なお、同全集から引用するにあたり、適宜句読を変え、現行の字体に改めている。以下同断。

<sup>5</sup> 竹山の『詩經』理解と礼学について、拙著『詩に興り礼に立つ——中井竹山における『詩經』学と礼学思想の研究』（国立台湾大学出版中心、2014 年）を参照されたい。

<sup>6</sup> 「草茅危言の後に書す」、『蘭室集略』卷之十二、「雜著」、前掲『復刻脇蘭室全集』、276 頁。原漢文。

関わる蘭室の顔子評価を考える。さらに、蘭室の思想がいかに熊本藩の指導者への建言書に集約され経世論として展開されていったのかを見していく。

## 二、学問のあり方

脇蘭室は23歳の時に『歳闇漫語』(天明6〔1786〕年12月の序)という隨筆を書いている。そこで述べられたことは、後述の『顔子』を経て、後に熊本藩の指導者に呈された数々の意見書や建言書に集約された思想、いわば蘭室の学問観や経世論につながっていく。

たとえば、蘭室は学問のあり方についてこのように述べる。「本とは何ぞや。わが身を修るなり。要とは何ぞや。人倫を明にするなり。学はもとより天が下を治るの道なり。此道世におこなはれ、人々身を修めねば、人倫こそに明にして、家国おさまり、天が下たひらかなり」という<sup>7</sup>。そこでは、『大学』の「身修まりて後に家齊う。家齊いて後に國治まる。國治まりて後に天下平らかなり。天子自り以て庶人に至るまで、壹是に皆な修身を以て本と為す」という言葉を踏まえ、学問とは天下を治めるためにあるものであると説かれている。実際、彼は続けて「学の法、載て大学の書にあり。いやしくもこそに志すもの、此書に考へずばあるべからず」と述べて、学問の基本を『大学』という書に求めているのである<sup>8</sup>。さらに、蘭室は孔子の「古えの学者は己れの為めにし、今の学者は人の為めにす」(『論語』憲問篇)という言葉を前提に、聖人が示した学問のあり方

<sup>7</sup> 脇蘭室『歳闇漫語』、『大分県史料(22)第八部・先賢資料』(大分県史料刊行会、1960年)、184頁。

<sup>8</sup> 蘭室は寛政10(1798)年35歳の時、師中井竹山に『大学章句』について多くの疑問を質し、そして竹山はそれに対して逐条返答している。「竹山先生答問書」として『脇蘭室全集』にも収録されている。蘭室がそれだけ『大学』という「天下を治める」ための書を重要視していることが窺えよう。また、学問の方針と心得として弟子たちに示すとともに「自警」のために書いた『同約詳説』では、同約5条のうちの1条目に「学問之本在修身。心不忘敬、身不懈礼事」と掲げている。そして、蘭室は次のように述べる。「『大學』に自天子以至於庶人、壹是皆以修身為本と云へり。初學の士、学問の根本こそにあることを先知るべきために、これを第一条に掲げて其意思を定めしむるなり」という。(『復刻脇蘭室全集』、74頁。)ここでも、学問の根本として『大学』の修身を強調していることがわかる。

をこのように述べる。

己が為にするものは内を務む。人の為にするものは外を務む。内を務るものは、己が心の正しからんことをねがひ、己が身の修らんことをねがふ。外を務るものは、人の目を耀かさんことをねがひ、人の耳を驚かさんことをねがふ。聖人の学は、己を修め人を治るの道なり。これをいかんぞ人の觀に供へ、人の聴を悦ばする設けとなすべけんや<sup>9</sup>。

さらに、人の耳目を引くために行動するような者を「市廬」、つまり市場の店にでも置いたら、人はあるいは買ってくれるだろう。それを「廟堂」すなわち政治を握る立場に就かせようものなら、「恐らくは蒼生に害」が及ぶかもしれない。他方、心が正しく身が修まる者なら、「以て朝に置べし。以て野に置べし」つまり、官職に就いても在野の身になっても一向に問題がない。「但朝に在れば、かねて人を善し、野に在れば、独其身を善す」と、蘭室は「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」という、あの『孟子』尽心上の名言を下敷きに自説を展開させているのである。

ここで注目したいのは、蘭室は学問の目的を「修己治人」に求めるという議論を学者に対して述べるに止まらず、以下に見るように実際の政治の指導者にも積極的に説いている、ということである。もちろん、為政者に仁政を求めるることは儒者にとってごく自然のことで、蘭室に限るものではない。しかし、熊本藩の指導者たちの信頼を受けた蘭室は、建言書などを通じて修己治人という儒教の政治的理念を説き聞かせ、為政者のるべき姿、いわば政治主体<sup>10</sup>の自覚を持つように働きかけることができたのである。その点、やはり特記すべきことであろう。

たとえば、蘭室は文化2(1805)年42歳の時、熊本藩藩主細川斉茲の世子斉樹(後、文化7〔1810〕年藩主に就任)が初めて入部した

<sup>9</sup> 『歲闌漫語』、『大分県史料(22)第八部・先賢資料』、188頁。

<sup>10</sup> 日本儒学における政治主体の形成については、辻本雅史著・拙訳「日本儒學的政治主體之形成」、潘朝陽主編『政道與治道：儒家的政治觀』(国立台湾師範大学出版中心、2016年)、347-361頁参照。

のに際して、賀頌の言葉に代えて世子たる者的心構えを『代頌編』としてまとめ呈上している。そこで、蘭室はこのように述べる。

世子稍長じたまひては、学に入り道を問ふと見へたるはいかなる事ぞとなれば、その十五歳におよびては大学に入れられ、大人の学問をなし玉ふ。道とは己を修め人を治むるの事なり。すなはち大学の篇に見へたる、明徳を明かにし、民を新にし、至善に止るなり。此三の者を大学の綱領と説て、大人の学の要旨を教るなり<sup>11</sup>。

むろん、これは朱子の「大学章句序」<sup>12</sup>を敷衍して述べたことで、蘭室自身の独創ではない。しかし、いずれ一国を治める立場になる者に『大学』の「修己治人」の教えを懇切に説くということは、世子という身分に自覚を持たせてより良い治世をもたらすよう、そのように蘭室が期待しているのを意味するものであろう。

その後、藩主に就任し入部した斎樹から文化 10（1813）年に肥後の陽春閣に召見された時、いまでも『代頌編』を読んでいると伝えられた蘭室は、感慨深く改めて本編を著した自らの胸中を識したのである。蘭室はこのように述べる。「此一巻は、文化二年乙丑、世子初めて国に入れ給ふ時しるして献じたる草案なり。頌に代ると名づけたるは、韓退之の頌を以てせずして規を以てすといへる意の如く、窃かに寸忠を寓するものあり。唐の玄宗開元二十四年秋八月千秋節に、群臣皆宝鏡を献ぜしに、張九齡ひとり前世興廢の源を述て、千秋金鑑錄と名づけて上たりし例にや庶幾すべからむ」<sup>13</sup>という。つまり、蘭室自身は正に本編の呈上をもって、諫官たる意思を表明した張九齡にあやかろうとしたのである。

蘭室は文化 9（1812）年の秋に執筆に取り掛かり、そして同年の10月に『煙霞間事』二巻を完成させて、それを熊本藩の嶋田嘉津次

<sup>11</sup> 『代頌編』、前掲久多羅木儀一郎編『復刻脇蘭室全集』、4 頁。

<sup>12</sup> 朱子「大学章句序」の原文に「及其十有五年、則自天子之元子・衆子、以至公・卿・大夫・元子之適子、与凡民之俊秀、皆入大学、而教之以窮理・正心・修己・治人之道」とある。

<sup>13</sup> 『代頌編』、『復刻脇蘭室全集』、18 頁。

大奉行に呈した。彼は、同書において学問の目的を修己治人に求める事を繰り返し強調した上で、学校を設立して次世代の政治を担うべき人材教育の重要性を次のように述べる。「人材を長育する事、王道の先んずる所なり。人材乏しくしては、事を立、政を施すことあたはず。こゝを以て、学校を置て教化長育の方をなす」という。その上で、蘭室は「四書」を核とする程朱学に学術の基本を据える。つまり、「程朱諸公の、学庸論孟に由りての学術は、後世の模楷たるは元よりの事にて、邦家の教化を助るもの」だからである<sup>14</sup>。

しかし、それは決して朱子学だけを尊崇して、他の諸学を排除するということを意味しない。むしろ、蘭室は「昇平以来、儒学大に闢け、碩儒も起りて、聖学を講明し、程朱の説を唱へけるに、藤樹陽明の学に従ひ、仁斎古義の門を立、徂徠古文辞の業を張り、其他家学をはじめ奇説を喜ぶ類もあり」と、諸学興隆の実情を指摘する。さらに、諸々の学派において人材が輩出し、「学術のいかんを問ず、成徳達材何の不可かあらん」<sup>15</sup>と、それぞれの学術の有用性を認めている。そして、蘭室は今の学者に必要な学問のあり方をこのように述べる。

今の学者、程朱の学の正大なる事を知り、末流には疎闊に入る事も有りと察し、元明諸家の説の従ふべきをも選び取、我邦先輩の家説にも考へ、流弊をも省みて戒とし、後生を諭導する所は、其才徳を成就するの方を示し、国家の用に供する心得あるべし<sup>16</sup>。

また、「学術は程朱を第一と心得、其論説の疎脱あるは、後世の公論に従ひてこれを補ふべし」<sup>17</sup>とも述べている。要するに、蘭室は学問の基本を朱子学に据えたうえで、元明諸儒の説をはじめ日本の諸流派の学問をも兼修することを勧めているのである<sup>18</sup>。

<sup>14</sup> 以上、『煙霞間事』巻之下、『復刻脇蘭室全集』、37 頁。

<sup>15</sup> 『煙霞間事』巻之下、『復刻脇蘭室全集』、38 頁。

<sup>16</sup> 『煙霞間事』巻之下、『復刻脇蘭室全集』、39 頁。

<sup>17</sup> 『煙霞間事』巻之下、『復刻脇蘭室全集』、40 頁。

<sup>18</sup> たとえば、『同約詳説』では、経書・史書・諸子百家そして雑書のほかに、「吾邦の典籍」をも読むことを勧めている。蘭室がいうには、「吾邦の事に闇く

さらに、蘭室は「学術治道」を示す模範に、水戸の「西山公」（徳川光圀）を筆頭として挙げ、その「洪博の学、公正の徳」に加えて朱舜水などの名儒を集めて「史業」を展開させたことを称えている。以下、会津の保科正之、備前の池田光政、自藩の細川重賢、白川の松平定信、そして米沢の上杉鷹山と、好学の名君たちがそれぞれ山崎闇斎など諸名士を礼遇し、治世をもたらした事績を挙げている。そして、上に立つ指導者の心構えを「此故に人君たゞ治道に志なく、学業を勤めざるを患るのみ」として、指導者だからこそ立志修業の必要性を強調している<sup>19</sup>。

以上のような議論は、蘭室の晩年に至るまで一貫して主張されていたものである。蘭室はその亡き前の年（文化 10〔1813〕年）に藩主細川齊樹から召見された時、『陽春獻言』という建言書、ならびに「国用略」「治教合一図解」「民田疑問一條」と 3 篇の解説書を呈上了した。たとえば、「治教合一図解」の中で、蘭室はこのように述べる。

此図を治教合一と名づけたるは、治と教との二つはもと一つに合たるものにて、はなれ／＼になるべきにあらず。（中略）さて此治教の大綱を分てば、修己と治人との二つたり。（中略）人を治るものは、家の内より國のはてに至るまで心を用ひ、手をつめて、たれ／＼もみな人柄をよくして其業をつとめ、各其所を得て、難渋なき如くはからふべきことなり。如斯なれば家齊ひ國治りて天下平かなるに至る。是大學にいふ所の民を新たにするなり<sup>20</sup>。

最後に、蘭室は「仰ぎ願くは治教の道一に合し、己を修るもの心術公正にして、躬行篤実、人を治るもの家法肅整にして、国政和平ならんことを。果して如斯を得ば、其徳教善政永く後世の模範たるべ

---

しては、学ぶ所唯異域の書に止り、大に事体を妨ることあり。是学者の知る可き所なり。若し書を読むこと狭小にしては、用を成すに足らず、博雜にしては用帰なきに至り、歎哉にしては通曉し難し。其先後輕重を審かにし、精苦を用てこれを読ざるべけんや」と、広範な読書の重要性を強調している。『復刻脇蘭室全集』、75 頁。

<sup>19</sup> 『煙霞間事』卷之下、『復刻脇蘭室全集』、39 頁。

<sup>20</sup> 『復刻脇蘭室全集』、51-52 頁。

し。治教をつかさどるの人おもはざるべけんや」<sup>21</sup>と、斎樹以下の指導者に期待を託しつつ理想の政治のあり方を掲げて締めくくったのである。

### 三、顔子に学ぶ修己治人の道

蘭室は寛政 8 (1796) 年 33 歳に『顔子』という書を著している。同書は『論語』『孟子』の集注と『中庸章句』をはじめ、『易伝』『孔子家語』『荀子』などの書にみえる顔子の言行に関する記述を集め、そして蘭室自身の評語をつけてまとめたものである。

顔子とは、いうまでもなく孔子が愛弟子としてその好学ぶりや過ちを二度とせぬことを褒めたり<sup>22</sup>、仁であり<sup>23</sup>賢である<sup>24</sup>ことを称え、そしてその若死にを悲しんだ顔回（前 514-前 483。顔淵とも）のことである。その人となりや行状に関しては、早く孔子・孟子の時代から評価されてきた。また、道家思想を唱えた『莊子』の中でも、儒教と異なった立場から顔回の姿が持ち上げられ、独特な顔回像を呈している。そして、老荘思想に強い影響を受けた学問として「玄学」が盛んな魏晋南北朝において、顔回はさらに理想的な人物像として同時代の人物評論の類比対象として利用されていた<sup>25</sup>。儒教では、特に宋以降その「楽しみ」の精神性が高く評価され、儒教史の上では突出した人物の一人として挙げられる<sup>26</sup>。

<sup>21</sup> 『復刻脇蘭室全集』、52 頁。

<sup>22</sup> 『論語』雍也篇に、「哀公問弟子孰為好学。孔子對曰、有顏回者好学、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣、今也則亡、未聞好学者也」とある。

<sup>23</sup> 『論語』雍也篇に、「子曰、回也、其心三月不違仁、其余則日月至焉而已矣」とある。

<sup>24</sup> 『論語』雍也篇に、「賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂。賢哉、回也」とある。

<sup>25</sup> 中国古代以来の顔回像ないし魏晋南北朝の人物批評における「顔子」像の利用について、吳冠宏『顔子形象与魏晋人物品鑒』(中国学术思想研究輯刊三編第十一冊、台北：花木蘭文化出版社、2009 年) を参照。

<sup>26</sup> たとえば、『論語集注』雍也篇の「一簞の食一瓢の飲」という章において、程子の言葉として次のように引かれている。「程子曰、顔子之樂、非樂簞瓢陋巷也、不以貧窶累其心而改其所樂也、故夫子稱其賢。又曰、簞瓢陋巷非可樂、蓋自有其樂爾。其字當玩味、自有深意。又曰、昔受學於周茂叔、每令尋仲尼顔子樂處、所樂何事」という。この節は『顔子』にも収録されているが、最後の「所樂何事」は「何事」となっている。『顔子』卷之上、「内篇」、『復

近世日本の儒者たちにおいては、顔回は誰でも評価し見習うべき人物であろう。しかし、顔回の言葉やその言行に関する文章を集めて一書にした儒者は、管見の限り脇蘭室以外はいなかった。蘭室の『顔子』著作の経緯とその顔子観について別稿で詳しく考察するつもりであるが、ここでは蘭室が捉えた顔子の「修己治人」の一面について見ておきたい。

まず、蘭室は『論語』に収録された、顔子が孔子に問うた次の二章に注目する。

顔淵、仁を問う。子曰く、己に克ちて礼に復るを仁と為す。一日己に克ちて礼に復れば、天下仁に帰す。仁を為すは己に由る、而して人に由らんや。顔淵曰く、請う其の目を問う。子曰く、礼に非ざれば視ること勿れ。礼に非ざれば聴くこと勿れ。礼に非ざれば言うこと勿れ。礼に非ざれば動くこと勿れ。顔淵曰く、回不敏なりと雖も、請う斯の語を事とせん。(「顔淵第十二」)

顔淵、邦を為むることを問う。子曰く、夏の時を行い、殷の輶に乗り、周の冕を服し、樂は則ち韶舞。鄭声を放ち、佞人を遠ざく。鄭声は淫、佞人は殆し。(「衛靈公第十五」)

蘭室は上の二章を挙げた上で、次のように解説する。まず、蘭室は『論語』全篇に顔子の問い合わせが載ったのは「唯だ此の二章のみ」として、「而して修己治人の道具われり」と説く。そして、「後の学者、聖人の教へに考へんと欲する者、其れ將に之を捨てて、而して<sup>げまく</sup>奚にか之かんや(後之学者、欲考於聖人之教者、其將舍之、而奚之乎哉)」と述べる。つまり、学者は本気で聖人の教えについて学ぼうとするならば、「修己治人の道」が具に示されているこの二章を置いて一体どこに求めることができようか、ということである。

蘭室はさらに解説を続ける。すなわち、「己れに克ちて礼に復る」というのは、「仁を為す」ための方法であり、「身を修める」ための

---

刻脇蘭室全集』、104 頁。

なお、宋明儒家の顔子観については、柴田篤「『顔子没而聖學亡』の意味するもの——宋明思想史における顔回」(『日本中國學會報』51、1999 年)などを参照。

要である。仁を為す主体はもちろん己自身にある。しかし、「その力を用いるの驗（其用力之驗）」すなわち仁を為す努力の効き目は、究極的に「天下の人之に与るに至る（至天下之人与之矣）」、つまり世の中の人々がみなその感化を受けて仁に帰るのである。蘭室は、孔子が顔回に答えた言葉を踏まえながら、修己の意味を敷衍している。

では、治人はどうか。「夏時殷輅、周冕韶舞、鄭声を放ちて佞人を遠ざく」といったことは、みな昔の聖王が政治を行った具体的な事柄であるとともに、「天下を治むるの則」である。政治を実行するのは上位の者である。しかし、その「教化の効」は、天下の人々が悉く「克己復礼」の行いを有するに至るのである。最後に、蘭室はこのように述べてこの二章の解説を終える。「是れ君民上下、以て愜和修睦する所にして、能く文明の治を成す者なり。思わざるべけんや（是君民上下、所以愜和修睦、而能成文明之治者也。可不思哉）」と、学者の深く思いを致すことを促す<sup>27</sup>。

「修己治人の道」は蘭室が生涯を通じて繰り返し主張し意を致すところである。ここで、その大きな前提や指針はこの顔子の2つの問い合わせおよび孔子の返答で明確に示されている、と彼が理解していることを確認しておきたい。

蘭室は『顔子』において、顔子が由るところとして「博文約礼」（『論語』雍也篇の孔子の言葉「君子、博く文を学びて、これを約するに礼を以てせば、亦た以て畔かざるべきか」による。子罕篇にも見える。）を挙げている<sup>28</sup>。そして、それを「聖人教育の方」<sup>29</sup>と認め重要視している。

また、『顔子』より後の著作であるが、文化9（1812）年の秋に書かれ、そして同年の10月に熊本藩の嶋田大奉行に呈された隨筆『煙霞間事』では、蘭室は顔子に触れてこのように述べる。

<sup>27</sup> 以上の引用は『顔子』卷之上「内篇」、『復刻脇蘭室全集』、103頁。漢文の書き下しは筆者によるが、参考に原漢文を括弧に入れる。

<sup>28</sup> 蘭室は『顔子』の序文で、「考其（顔子——引用者注）所由焉、則博文約礼、是而已矣」と述べている。『復刻脇蘭室全集』、98頁。

<sup>29</sup> 『顔子』卷之上、「内篇」、『復刻脇蘭室全集』、104頁。

学問の道も、為政の道も、条理をあやまりては無用の労をなすのみにあらず、善惡を転倒し、治乱を変革する事あり。慎むべし。学者の条理を觀ること多端にあらず。己を修め人を治る二つのみ。為政者の事もこれのみなれば、必竟その条理を会得すると、其条理を処置する事にて、七十子の学問、七十子の事業を見て知るべし。顏子の如きは、事業のいふべきものなしといへども、王佐の才と称し、第一等の人たり。もし遇ふ所あらば、管仲子産の伍にあらざるは勿論にて、伊尹周公其美をわかつべし<sup>30</sup>。

そこでは、学者も為政者も聖賢の教え、特に七十子の学問と事業に学ぶべしと説かれるが、何より「修己治人」は行動の指針ともいえる「条理」として掲げられている。

そして、顏子に対する評価についても、伊尹や周公に匹敵するような「王佐の才」を持ち、修己治人の教えを会得した「第一等の人」として理解されている。言い換えれば、蘭室が顏子に学ぼうとしたのは、何より己立ってさらに広く人を立てようという為政者のあり方なのである。

#### 四、脇蘭室の経世論

以上、学問のあり方や「修己治人」という為政者としての心得をめぐる蘭室の議論を見てきた。では、具体的にどのように政治を行っていくべきか、つまり蘭室の具体的な経世論を以下見ていこう。

##### (一) 食糧充足および備蓄節儉

蘭室は『代頌編』において将来藩主になる世子に対して、国を治めるために最も重要なことを次のように教える。

国家を治るに、至て急なる所は食貨の二つなり。食は穀類にて人の生命を養ふもの、貨は布帛の衣となすべきもの、金銭の用に供すべきものなり。食貨余りあれば、人を聚め国を保つことを得。食貨不足なれば、人散じ国危し。しかるに此米穀財用を

<sup>30</sup> 『煙霞問事』卷之上、『復刻脇蘭室全集』、36 頁。

足すの要は、制度を立ると節儉を守るの二条に在るのみ<sup>31</sup>。

食糧の充足は国を治める上での基本的条件である。その条件を保持するため、蘭室は制度を立てることと節儉を守ることに求めている。その上で、蘭室は『礼記』王制篇の「入るを量りて出づるを制す」などの文言に拠りながら、食糧充足と備蓄節儉の重要性を説いていく。特に昇平の時代になって久しいこの頃、世の中に「安佚」「奢侈」の風習が蔓延る中、そのことをもっと声高に強調しなくてはならない、と蘭室は認識している。それに加えて、「国用」の不足による借財（「称貸」）の発生を能うかぎり避けたいものであると彼は指摘する。要するに、「甚きものは、今年の賦税今年の用に供するにたらずして、はるかに明年の賦税を指て称貸す。（中略）称貸の計を主とするは、知者のせざる所にして、國の長策を立る慮に非ず」というのである<sup>32</sup>。

しかし、熊本藩の財政は決して安定したものではなかった。蘭室が藩校時習館の訓導に迎えられる前の寛政4（1792）年に、肥前雲仙岳の噴火に伴う津波によって、肥後領を含めた周辺の地域は莫大な被害を蒙った。領地復旧のための費用に加え、種々の臨時支出や度重なる吉凶事の出費がさらに藩の財政を圧迫した。支出不足分に充てるために借財に頼ることになったわけであるが、深刻な時はたとえば享和2（1802）年に「借財は一一七万両余に達していた」という<sup>33</sup>。蘭室の上記の建言はその財政難の現状を知った上で、現実味を持ったものであろう。

そのためにこそ、蘭室は『煙霞間事』で「節儉を行ふこと、国を治め民を養ふの急務なり」<sup>34</sup>としたり、「富貴の保ち難き事かくの如し。節儉を守らざることを得んや」<sup>35</sup>と述べて、繰り返し節儉の大切さを強調したのである。藩主斎樹も財政の深刻さを認識し、文化

<sup>31</sup> 『代頌編』、『復刻脇蘭室全集』、9頁。

<sup>32</sup> 『代頌編』、『復刻脇蘭室全集』、10頁。

<sup>33</sup> 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第三巻 近世I』（熊本史、2001年）、306頁。

<sup>34</sup> 『煙霞間事』卷之上、『復刻脇蘭室全集』、34頁。

<sup>35</sup> 同上、『復刻脇蘭室全集』、35頁。

9（1812）年に入部後ただちに「格別の僕約」を命じたのである<sup>36</sup>。その意味で、翌10年2月10日の陽春閣での召見は、斎樹が蘭室に財政再建策の提示を期待してのものである。事実、『陽春獻言』には7条の「覚書」が附されているが、第一条は「今日之御急務は御借財を被為済候儀と奉存候事」として、早急に借金の返済を勧めている。さらに、そのための解説書として「国用略」を著して借財の返済法を詳しく論じ、そして節儉に関して3か条にわたる提言を行っている<sup>37</sup>。

陽春閣での召見の翌11日、藩主斎樹が確かに上記の建言を聞き入れて「追々御執行可被遊」ということで、大奉行嶋田嘉津次から『煙霞間事』の写しを求められたため、蘭室は「則手扣之毫通を差出」したのである<sup>38</sup>。

## （二）安民

蘭室は『代頌編』において時の世子斎樹に対して、「民事を知り下情に通ずること、人君の専ら心を用ひ玉ふべき所なり」と、上に立つ者は下々の民の実情をよく知るべきであると建言をしている。それは、一国の治者が「農桑は本業なることをしりて、これをすゝめて衣食の源を利し、臣民の情鬱屈せざれば、上下同体の強をなすことをしりて、これを通して政治の化を厚する」ことは、「天下万世の定則」であるからである。

しかし、もし民の生活が苦しくなると、国の政治は危くなることがある、と蘭室は注意を促す。つまり、「もし此衣食に乏しければ、飢寒の患たちまちにせまりて、人みな礼節を忘れ、下情通ぜざれば、君民の間隔絶して怨恨を結ぶ」ことに至る。甚だしい時は「遂には党をあつめて強盜となり、土を離れて乱賊となる」深刻な状況もある。蘭室によれば、これは「国家内変」の初発であり「深くおそるべき所」であるという。「安に居て危を忘れず」（『春秋左氏伝』の「安

<sup>36</sup> 前掲『新熊本市史 通史編 第三巻 近世I』、311頁。

<sup>37</sup> 『陽春獻言』、『復刻脇蘭室全集』、47-48頁。

<sup>38</sup> 前掲書、『復刻脇蘭室全集』、48頁。

に居て危を思う」から)と彼は警告をするが、社会の情勢に敏感だった蘭室はこの時既にその初発の兆しを見越していたのかもしれない<sup>39</sup>。

熊本藩では、天明3(1783)年浅間山の噴火による影響が及び不作が発生し、行き倒れる者や疫病の流行による死者が多く出た。それ以後、「天災・地変・飢饉・凶作が多発し、領民を苦しめ」、そして農民や都市民の打壊しが頻発したのである<sup>40</sup>。これは肥後領に限ることではなかった。文化8(1811)年から翌年の間に、豊後豊前の各地で民衆が蜂起する事件が起って世間を騒がせたのである。蘭室はその直後、そういった民衆蜂起の顛末を『党民流説』としてまとめ、文化9(1812)年に熊本藩に呈上した<sup>41</sup>。ただし、他藩に及ぶことのため憚りがあったからか、自著という形ではなく、「杞国憂讐」と「齊東野史」という匿名が使用されたのである。同編の序文ではこのように述べられている。

民心の従違はすなはち治乱の係る所、かの党民父母に離れ、妻子を棄、家居田産をかへりみず、長上に抗し、禁令を犯し、生を輕んじ、刑に触る。實にやむことを得ざるに出るのみ、悲まざるべけんや。斯民をしてこの極に至らしむるもの、委細其人に非るを以ての故なり。侯家もとより其責を辞する事を得ず<sup>42</sup>。下々の民に全てを投げ捨ててまで、反乱行動を起こすことに至らしめた治者を咎める言葉はこの後も続く。要するに、上の者が財政を悪化させ、さらに「聚斂」というように租税を必要以上に徵収して民を苦しめた結果、「下怨の衆背き、遂に変乱を生ずるに至ったのである。蘭室は問うて曰く、「嗚呼治乱の機察し難きに非ず。列国の困かくの如し。これを済ふの道なかるべけんや」と。もし為政者がこの意を汲み取って、民の苦しみを知り政治改革でも行うことがで

<sup>39</sup> 『代頌編』、『復刻脇蘭室全集』、11頁。

<sup>40</sup> 『新熊本市史 通史編 第三巻 近世I』、288頁。

<sup>41</sup> 『復刻脇蘭室全集』所収の久多羅木儀一郎による『党民流説』の解題(3-4頁)を参照。

<sup>42</sup> 『党民流説』序、『復刻脇蘭室全集』、112頁。

されば、「此冊子たゞ郡国的小鑑のみに」とどまらず、「亦かの天下を治る一大鑑」になり得るのでないか、蘭室はそう期待するのである<sup>43</sup>。

蘭室が文化9（1812）年に『党民流説』という編を熊本藩に呈上したことを先に述べた。翌10年、藩主斉樹への建言書『陽春獻言』においても、「御近領百姓騒動之事」として上記の党民蜂起に言及し、そして事の発端は民を苦しめる「苛政」によるものであると次のように述べる。

諸家御困窮にて御參勤難被相辦、小才覚有之者に被任候故、苛政に罷成、遂に民間之困苦に及候をも不顧候て、近年之如き変を生申候。實に可恐次第に御座候段申上候<sup>44</sup>。

さらに、「覚書」の中でわざわざ「諸御物成大体是迄之形にて被差置、聚斂體之義無御座候様にと奉存候事」と、年貢の徵収をこれまで通りにして、決して「聚斂體の義」にならないよう念を押したのである<sup>45</sup>。

### （三）海防武備

先に蘭室は衣食が足りず飢寒に耐えない民が蜂起に走ることを「内変」と捉えたことを見た。彼によれば、内変ならその兆しが容易に発見できるし対応もさほど困難な事ではない。それに対して、外からの侵入（「外寇」）となると、分かりにくくなるし対応も難しくなるという。『代頌編』において、彼はこのように述べる。

内変の機は猶見易し。これに処するも亦甚難からず。いかにとなれば、これ我域中より起りて、恩愛信義の及ぶ所なればなり。唯外寇の形は尤察し難く、これに応ずるも亦至て艱なり。いかにとなれば、彼は海表より来りて、虚実利害の明らかならざる所なればなり。今の人我邦の時勢に習ひて、異邦の人情を察せず。外寇の事決して無しと思ふは疎かなりといふべし<sup>46</sup>。

<sup>43</sup> 『党民流説』序、『復刻脇蘭室全集』、112頁。

<sup>44</sup> 『陽春獻言』、『復刻脇蘭室全集』、47頁。

<sup>45</sup> 前掲書、『復刻脇蘭室全集』、48頁。

<sup>46</sup> 『代頌編』、『復刻脇蘭室全集』、11頁。

さらに、蘭室は寛政年間から文化年間にかけて、ロシア船が根室（「蝦夷の地」）や長崎へ通商の要求に来航したことを挙げて、外寇の事を決して看過し難いことだと警告する<sup>47</sup>。彼は、「内変の機」は「見易く処しやす」いものであるが、「外寇の刑」は「察し難く応じがた」といいうことを繰り返し主張する。その上で、蘭室は、人君たる者が常に文事を修業し武備を厳重にせねばならない、そのことを世子斉樹に語る。

人君常に文事を修め、武備を厳にし、教諭調練を以て遠く乱賊を退け玉ふべし。かの姦計の最甚きものといへども、其民文明にして異教にまどはず、其国武威にして利誘に陥らざれば、妖術巧智も施す所なかるべし。嗚呼、内を護り外を禦ぐの要、治を久くし乱を遠ざくるの務、古聖の道みなこれを具せり。人君心を尽し玉はずばあるべからず<sup>48</sup>。

また、『煙霞問事』において、蘭室は武備にかかる事として兵書を「和漢に通じて」読むのを勧めるとともに、文事武備の重要性を改めて力説する。つまり、「其治を永くする道とは、己を修め人を治るのつとめを怠らざる也。乱の遠ざくるの道とは、文事を講じ、武備を整へて廢ることな」<sup>49</sup>いようにすることである。

蘭室が長く居住した鶴崎は、肥後領の飛地で豊後の東北隅に位置する港町であるが、熊本藩が江戸へ参勤交代するための要所として従来重要視されてきた。また、瀬戸内航路の船出地でもあり、鶴崎番所も置かれていた。蘭室は晩年に『辺備略』（文化 10 [1813] 年成立）を著して、辺地としての鶴崎の特殊性をこのように述べる。

<sup>47</sup> また、通商交易のための異国船の来航に対して、蘭室は『蔭海漁談』（文化四〔1807〕年）という隨筆の中で次のように明らかに否定的な立場を取っている。「互市の如きは、其國の有る所を以て、我無き所にかふ。各其利あるに似たりといへども、通じて是を論ずれば、海外無価の物を得て、我國有用の貨を失し、要するに國計の善なる者にあらず。（中略）互市交易の事なくて、只信を通じ新に好を結ぶ、もとより又我國の禁なれば、ゆるがせになりがたし。こゝを以て通ずることをせず。朝廷の意かくの如し。再び來ることを費すことなかれ」という。『復刻脇蘭室全集』、400-401 頁。

<sup>48</sup> 『代頌編』、『復刻脇蘭室全集』、13 頁。

<sup>49</sup> 『煙霞問事』卷之下、『復刻脇蘭室全集』、43 頁。

鶴崎の如きは、本藩と上国との通接をなす要地にて、他藩の中に独立する故、別して意を用ゆべき所がらなり。況海浜にて、異国船の警もあり、穀貨を積み置るゝを以て、寇盜の戒もあり、かたがた尋常の辺地に同じからず<sup>50</sup>。

つまり、鶴崎は海浜に位置する要地であり「異国船の警」もある所柄である。それゆえ、蘭室は平時から「警備防禦の術」<sup>51</sup>を行わねばならないとして、「隊伍」「調練」「教養」と項を立てて具体的な方策を挙げている。

たとえば、彼は「急場御備水軍四隊」「陸軍四隊」「鶴崎警備二隊」と計 10 隊の人員を備えるべきであるとし、「編伍」の図まで描いて説明している<sup>52</sup>。調練については、彼は「しかるに陸方は勿論御船手の面々も、先陸陣の心得にてこれを調練し」た上で、「浦船漁舟等に乗せて調練し、海上の働きを習」わせるべしと述べる<sup>53</sup>。実際、鶴崎番所には船手が多数在住し、藩主が乗船する渡奈之丸も係留されていた。そして、番所の番代は沿岸の水路を巡検したり、船手たちの砲術などの練習に臨場したりした。蘭室自身もそれを巡視したことがあるという<sup>54</sup>。

さらに、「教養」については、彼は「文武の業を以て子弟を教養すること、古来人材を殖するの良法なり」ということを前提に、鶴崎で「文武の稽古場」の建設を次のように勧めている。

願ふ所は、鶴崎に於て一所教養の館を設け、文武の稽古場とし、凡御家人たるもの、こゝに入て講習し、諸の師職ありて、これを導きなば、漸々に孝弟忠信の道行れ、節制技擊の法熟し、治平の吏務、変故の兵革、並に其材を得て、國家永久の洪益をなすべきのみ。然らざれば、人物衆多なりといへども、器械具はれりといへども、糧材富りといへども、枕を高くして意を安ん

<sup>50</sup> 『辺備略』、『復刻脇蘭室全集』、58-59 頁。

<sup>51</sup> 前掲書、『復刻脇蘭室全集』、54 頁。

<sup>52</sup> 前掲書、『復刻脇蘭室全集』、55-57 頁。

<sup>53</sup> 前掲書、『復刻脇蘭室全集』、57 頁。

<sup>54</sup> 鹿毛基生『毛利空桑——その思想と生涯』(双林社、1982 年)、6-7 頁参照。

することあたはじ。可思かな<sup>55</sup>。

「諸の師職ありて」と述べられたことは、既述のように儒学だけではなく他の諸学術も学習すべきだとする蘭室の考えから来るものであろう。ともかく、蘭室は要所鶴崎で文武の稽古場として「教養の館」を建設するように、『辺備略』の中でそのための図面まで描いて提言したのである。

鶴崎での稽古場建設に関する蘭室の提案は、藩の指導者にいかに受け止められたかは定かではない。しかし、蘭室晩年の弟子で後に帆足万里の門下になった毛利空桑は、鶴崎に藩立郷校の建設を建議した。藩はそれを認め、万延元（1860）年に「成美館」を建設した<sup>56</sup>。その点、蘭室の構想は弟子の毛利空桑によって実現されたと言ってよい。

## 五、おわりに

以上、脇蘭室の著作とりわけ彼が熊本藩主をはじめとした指導者に呈した建言書などを中心にその思想を見てきた。蘭室においては、「学問は天下を治めるためにあるものだ」という考えは、生涯を通じて終始貫かれていることが分かった。また、彼が顔子を高く評価したのもそのことと深く連関している。彼は、孔子や顔子といった聖賢によって示された立志修業と修己治人のあり方をもって、煙霞書楼に集まつた門弟たちを教育していた。また、著述などを通じて藩の指導者たちに治者としての自覚を喚起し、民衆に安定した暮らしをもたらす政治を行うように働きかけたのである。

18世紀後半から19世紀初頭を生きた蘭室は、上見てきたように早くから日本が直面した内憂外患の危機を認識していた。『党民流説』に見られるように、民心の向背をよく捉えた彼は、為政者に対して仁政を求め辺備海防の充実を訴えた。それと同時に、危機の時代に

<sup>55</sup> 『辺備略』、『復刻脇蘭室全集』、58頁。

<sup>56</sup> 毛利空桑はさらに洋式兵術訓練のために、明治元（1868）年に藩に観光場と有終館を藩に進言して建設させたのである。前掲鹿毛基生『毛利空桑——その思想と生涯』、15頁参照。

応える人材を育成するための教育を重視し、特に要所の鶴崎に文武兼修の稽古場の建設を建議したのである。

蘭室は『蘭室集略』や『蘭室集略続編』など多くの漢詩文を書いているが、儒者本来の仕事ともいるべき経書注釈の書を遺してはいない。彼は朱子の註に対して、「細義に於ては猶遺議あるべし」としつつも、「朱子の新註に至て定りたれば、新註の精密は實に比倫なし」と絶賛している<sup>57</sup>。また、彼は朱子学を学問の基本と据えつつ諸学を兼修し、特に和歌や和学をも嗜み、『見し世の人の記』など多くの和文著作を遺している。これはやはり、学問は天下を治めるための道であるとする、彼のいわば実用的な学問観と密接な関係にある。

既述したように、蘭室は身をもって修己治人の思想を体現した顔子のことを高く評価する。そして、顔子の由るところの「博文約礼」を「聖人教育の方」として強調する。蘭室はそのことを前提に、儒学を基本としつつ余力あれば「梵典」や「蘭書」を涉獵しても良いという態度を取っている。特に後者に関しては、彼は若い頃三浦梅園に学問を請うて、そして梅園の亡き後その子息修齡を助けて梅園の『贅語』や『玄語』を校訂した。また、その高弟の帆足万里は『修辞通』や『窮理通』といった著作を有する人物である。そして、蘭室は僧侶ともよく付き合いをし、仏教などに対して「かの神仙浮図老莊百家亦采るべきものなり」と、それなりの有用性を認めている。要するに、学者は「古經正史」「宝訓賢伝」を含める全ての書に対して、「別に一隻眼を具して」その「精粹なるもの」を汲み取らねばならない。決して「書魔の玩弄する所」となってはなるまい。詰る所、「王者の道、聖人の学は、みな人世を主とし、人事に切なり」とする蘭室は、あくまで人倫社会に資する儒学を土台に据え、他の諸学術を無用とせずそれを賢く摂取すべきだと考えているのである<sup>58</sup>。

なお、隨筆『見し世の人の記』で「隠操ありて世に出ることを厭」

<sup>57</sup> 『煙霞間事』、『復刻脇蘭室全集』、40 頁。

<sup>58</sup> 『煙霞間事』卷之上、『復刻脇蘭室全集』、28 頁。

<sup>59</sup> うと評した、師竹山の実弟の中井履軒に関しては、蘭室はその学説を特に挙げて論評してはいなかった。しかし、履軒の諸『雕題』<sup>60</sup>を筆写したり、その『七経雕題略』という蔵書を持っていることから察するに、蘭室はある程度履軒の学問を意識していた、ということを付け加えておきたい。

脇蘭室は豊後の小浦から熊本、大坂へと遊学し、多くの師友たちと出会い、知的な交流を深めた。そして、熊本藩藩校時習館の訓導として迎えられ、さらに鶴崎で藩士子弟などの教育に長年携わっていた。そのような経歴の持ち主の蘭室は、正に九州や上方を含めた西日本における儒者や僧侶など人々の思想文化的交流を考える上で格好の人物であり、いわば結節点の役割を果した人物である。今後、蘭室を含めてそうした「無名」な人々の活動について、さらにさまざまな観点から捉えていきたい。

**【附記】**本稿は2名の匿名査読委員より貴重なコメントと修正意見をいただいた。厚く御礼申し上げる。また、初稿の段階で友人の李芝映氏より多くの助言をいただいた。特記して感謝申し上げる。なお、本稿は行政院科技部の研究計画（103-2410-H-032-054-、104-2410-H-032-077-）による成果の一部である。

### 参考文献（年代順）

- 西村天囚（1911）『学界乃偉人』梁江堂書店  
 大分県史料刊行会（1960）『大分県史料（22）第八部・先賢資料』大分県史料刊行会  
 筒井清彦（1974）『愚山脇蘭室先生』豊岡小学校創立百周年記念行事事業達成

<sup>59</sup> 『見し世の人の記』、『復刻脇蘭室全集』、380頁。

<sup>60</sup> たとえば、『脇蘭室全集』所収の「年譜」によれば、蘭室は文化二（1805）年に『書經雕題』『礼記雕題』そして『左伝雕題』を写している。『復刻脇蘭室全集』、619-620頁。

会帆足図南次（1978）『叢書日本の思想家、帆足万里・脇愚山』明徳出版社

久多羅木儀一郎編（1980）『復刻脇蘭室全集』防長史料出版社

鹿毛基生（1982）『毛利空桑——その思想と生涯』双林社

柴田篤（1999）「『顏子沒而聖學亡』の意味するもの——宋明思想史における顏回」『日本中國學會報』51

新熊本市史編纂委員会（2001）『新熊本市史 通史編 第三卷近世 I』熊本市

吳冠宏（2009）『顏子形象与魏晋人物品鑒』中国学術思想研究輯刊三編第十一冊、花木蘭文化出版社

小串信正（2014）『脇蘭室関係資料集』脇蘭室を読む会

田世民（2014）『詩に興り礼に立つ——中井竹山における『詩経』学と礼学思想の研究』国立台湾大学出版中心

辻本雅史著・田世民訳（2016）「日本儒學的政治主體之形成」、潘朝陽主編『政道與治道：儒家的政治觀』国立台湾師範大学出版中心